

聖霊降臨後第17主日(特定23)説教 2011/10/9
聖マタイ福音書第22章1節～14節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

先週に引き続き、イエスさまのたとえ話が今日の福音書です。イエスさまがエルサレムに入城されたあと、祭司長たちや長老たちとの間で、権威についての論争があつて、その後3つのたとえ話が語られました。その3番目のものです。

このたとえは、「婚宴」のたとえと呼ばれていますが、天の国が婚宴にたとえられています。聖書では、世の終わりに実現する神の国は、しばしば宴会にたとえられます(マタイ8:11, ルカ14:16～、黙示録19:5～)。今日の旧約聖書日課も、終わりの日にシオンの山で催されるメシヤの祝宴についての預言が語られています。

「万軍の主はこの山で祝宴を開き/すべての民に良い肉と古い酒を供される。/それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒」と語られていますが(イザヤ25:6)、神の国の宴会で用意される食事はとびきり上等な食事で、それにあずかるものは、誰もが満ち足りて喜びに溢れると預言されています。

今日のたとえで、王さまが用意をした婚宴はこのような素晴らしい宴です。王の牛や家畜が屠られて用意されるのです。そんじょそこらのものとは比べようのない贅沢な食材で用意された食事です。しかし、婚宴に招かれた人たちはその素晴らしさをイメージできなかったのでしょうか。折角の招待を断ってしまいます。王さまの婚宴よりも自分の仕事の方に関心を寄せるのです。自分の命を保ち、満ち足りた生活を送るためには、仕事を休むわけにはいかないと考えるのです。

これは、たとえの中だけのことではありません。わたしたちの話でもあると思います。主日ごとに主の食卓に連なることは、信仰生活の原則です。家来が、「食事の用意が整いました。すっかり用意ができています。さあ、おいでください」と招かれた人々へ伝えた言葉、これは聖餐への招きの言葉でもあります。

しかし礼拝へ出席するよりは、自分の仕事、関心、人間関係、様々な事情を優先させることが、しばしば起こります。そうしなければ、自分も家族も生きていけないと思ひ込むからです。現実の生活に重きを置かざるを得ないので。

厳しく言えば、このような信仰の態度は、中途半端だということになります。不徹底な態度に対しては、必ず批判が出て来ます。王である神さまが神の国における食事へと招いて下さっているのに、神さまのご招待と自分の都合とを天秤に掛けて、自分の都合の方を優先させるのはけしからんというのです。このような批判は、真面目な信仰生活を送っている中から生まれてくることが多いと思います。

これは正論ですから、その前には反論を展開する余地など全くありません。ただただ頭を垂れるほかありません。しかし単純に決めつけて切り捨てれば、それですむ問題でしょうか。一人一人の事情や理由に目を向けるならば、そこに深い悩みや心の底からの痛みのあることを理解しなければなりません。そしてそのような状況の中であって、尚かつ神さまの招きに応えようとしている姿勢があれば、それを暖かく受け止めることも大切なのではないのでしょうか。

たとえの中では、王さま2度にわたって招待した人たちに家来を送り、迎えようとしています。最初の家来は旧約の預言者、2度目の家来は基督教の伝道者を指しています。招待を受けた人たちは、2度目に遣わされた家来たちを「無視し」、「捕まえて乱暴をし、殺してしまった」と描かれています。これは福音を受け入れないユダヤ人が基督教の伝道者を迫害したことを言おうとしているのでしょうか。主の招きの言葉にわたしたちも耳を傾けることなく、無視し、黙殺しているようなことはないのでしょうか。全くないと言いきれるならば幸いです。

王は招きを拒んで家来たちを殺した人々を、軍隊を送って滅ぼし、町を焼き払います。これも又乱暴な話です。おそらくこの背景には紀元70年にユダヤ戦争でローマ軍の攻撃によりエルサレムが陥落し、神殿が崩壊した歴史があるのでしょうか。マタイ福音書の著者の見解によれば、そのような歴史的イベントが起こったのは、ユダヤ人が福音を拒否したため、その結果としてエルサレムが滅ぼされることになったのだと理解したのです。

あらかじめ招かれていた人たち、即ちユダヤ人が、神さまの招待を断ったために、今度は王さまは、見かけたものは誰でも連れてきなさいと家来に命じます。家来は命令通りにしたので、婚宴の席はいっぱいになります。神さまの招きは、ユダヤ人の拒否を契機にして、世界の全ての人々に及ぶことになりました。だから今日、わたしたちも神さまの招きに応じて、こうして礼拝に加えていただいているのです。

そこに招かれたのは善人だけではありません。善人も悪人も区別なく招かれました。山上の説教には、「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(5:45)とありますが、父なる神さまは全ての人々にお恵みを与えて下さるのです。

お寺さんにお参りに行く人たちのことを善男善女と呼びますが、仏さまに帰依した人たち、仏さまの力に頼りすがろうとする人たちのことです。前世で、或いは今世で善行を積んだので、在家の身で仏さまの教えを聞くことが出来るようになった人たちです。それと同じように、教会に来る人は皆、良い人ばかりで、教会は善男善女の集まりのように外から見られることがあります。それに越したことはないとは思いますが、教会に招かれているのは善人ばかりではありません。悪人も共に招かれているのです。王の家来たちは、「善人も悪人も皆集めて来た」と書かれています。

パウロはローマの信徒への手紙の中で詩編14編を引用して、「正しい者は一人もいない。/悟る者もなく、/神を探し求める者もない。/皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。/ただの一人もいない。」(3:10~12)と言っています。パウロによれば招かれる人は皆、善人ではないということになります。

以前に「毒麦」のたとえを学びましたが、その中で、良い麦も悪い麦も「両方とも育つままにしておきなさい」(13:30)というみ言葉を聞きました。その折に、神さまの裁きに先立って人を裁くようなことをしてはいけません。裁きは終わりの日にイエスさまご自身が独特の仕方でなさることで、神さまは今忍耐をもって待っておられるのだから、人が善悪を性急に判断して、両者の間に線を引くようなことは危険なことであると学びました。教会は、決して善人ばかりが集まっているところではない、ということが前提となっています。

王さまの婚宴に招かれるというのは、その資格が自分にあるから招かれたというわけではありません。善行を積んだために、神の国の宴に連なる資格が備わったからというわけではありません。招かれる条件や資格など、自分には一切ないにも関わらず、招いてくださっている。むしろ悪人であるが故に、神さまの招きが、お恵みとして与えられるのです。イエスさまの十字架が、わたしたちに対する神さまの招きを可能としてくださったのです。

その王の招きに応じて集められた客の中に、婚礼の礼服を着ていない者が一人いたとあります。王さまはこの人に、なぜ礼服を着ないで来たのかと、その理由を尋ねます。しかし王さまの問いに対して、この人は黙ったままで返事をしません。そのため王さまはお仕えしている人に、この人を外の暗闇に放り出せと命じます。

この人は道を歩いている、突然、王さまの婚宴に連れて行かれました。だから礼服の用意などはなかったはずだ。それを礼服を着ていないから暗闇に追い出すというのは無茶な話だ、という弁護論がなされます。しかし旧約聖書の伝統では、王や身分の高い人は、宴会に人々を招くときには礼服を用意して与える習慣があったと言われています(創世記45:22)。王さまが与える礼服を着ていない、それが暗闇に追い出される理由です。この人が善人か悪人かが問われたわけではありません。礼服を着ていないため放り出されたのです。王の与える礼服とは何でしょうか。どうしたら礼服を装うことになるのでしょうか。神の国にふさわしいと認められるのでしょうか。それが問題です。

このたとえは王が王子のために催した婚宴です。王子の結婚披露宴です。この宴に溢れ出るもの、それは喜びの渦です。大きな喜びの渦が婚宴全体に満ち満ちるであろうことは、わたしたちの経験からも十分理解できることです。その喜びを分かち合い、共にすることこそが、婚宴に最もふさわしい礼服を身にまとうことになるのではないのでしょうか。

もし、この喜びの席に一人だけ苦虫を噛みつぶしたような顔をしていたらどうなることでしょうか。放蕩息子の物語の兄がそのような人物でした。父親が、財産を食いつぶして戻ってきた弟を迎えて、一番良い着物を着せ、手に指輪をはめてやり、肥えた子牛を屠って宴会を始めたときに、畑仕事から帰ってきた兄は、父親のそのようなやり方に怒って家に入ろうとしませんでした。この兄は極めて真面目な正しい生き方をしている人です。信仰

生活に忠実な模範的な人物です。しかしこの兄には喜びがありませんでした。喜びに生き、喜びの輪に加わることが出来ませんでした。だから野良着のまま家で、宴会の外に立ち続けるほかなかったのです。その兄に対して父親は、「弟は死んでいたのに生き返ったのだ。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて喜び楽しむのは当たり前ではないか」(ルカ15:32)と呼びかけるのです。一緒に喜ぼうではないかと、喜びの中へ招くのです。

神さまの招きは、私たちにその値打ちがあるから、私たちが招きにふさわしい者だから、当然のようにお招きを受けるということではありません。それはあくまでも神さまのお恵みとして与えられるものです。その神さまの招きにわたしたちが応えるときに、神さまの喜びが天に起こるのです(ルカ15:10)。そして神さまの喜びの中にわたしたちも加えられて喜びを共にすることが、礼服を着ることになるのではないのでしょうか。そのような神さまとの交わりにわたしたちが生きることが、「神の国にふさわしい実を結ぶ」(21:43)ことになるのではないのでしょうか。

わたしたちの毎日が、神さまの喜びに包まれた毎日であるよう、晴れやかな顔で日々の歩みを送りたいと思います。